

鏡花全集

卷三

讀心全集

工業学院图书馆
藏書章

鏡花全集 卷二 第二回配本

昭和十七年九月三十日
昭和四十八年十二月三日

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

龍潭譚	(明治二十九年十一月)……………	一
勝手口	(明治二十九年十一月)……………	三五
又螳螂鯁鐵道	(明治二十九年十二月)……………	六七
化鳥	(明治三十年四月)……………	一三
凱旋祭	(明治三十年五月)……………	一五一
堅パン	(明治三十年五月)……………	一六三
さゝ蟹	(明治三十年五月)……………	一七九
風流蝶花形	(明治三十年六月)……………	二〇七

清 心 庵	(明治三十年七月).....	三七
怪 語	(明治三十年八月).....	三六
なゝもと櫻	(明治三十年十月).....	三〇三
髯 題 目	(明治三十年十二月).....	四四三
山 中 哲 學	(明治三十年十二月).....	五三五
暗 ま ぎ れ	(明治三十年十二月).....	五八三
玄 武 朱 雀	(明治三十一年一月).....	六〇三

龍
潭
譚

躑躅か丘

鎮守の社

かくれあそび

あふ魔が時

大沼

五位鷺

九ツ餅

渡船

ふるさと

千呪陀羅尼

躑躅か丘

日は午なり。あら、木のたらく坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、たゞ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき處に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一點の雲もなく、風あたたかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯かで、しのびて來つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり來れり。眉太く、眼の細きが、向さまに顛卷したる、額のあたり汗になりて、のしくと近づきつゝ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞく。」

といひずてに眦に皺を寄せてさつゝと行過ぎぬ。

見返ればハヤたらゝさがりに、其肩躑躅の花にかくれて、髪結ひたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの徑遠く、小川流るゝ谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の兒の手をひきて彼方にゆく背姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。行く方も躑躅なり。來し方も躑躅なり。山土のいろもあかく見えたる、あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に歸らむと思ふ時、わが居たる一株の躑躅のなかより、羽音たかく、蟲のつと立ちて頬を掠めしが、かなたに飛びて、およそ五六尺隔てたる處に礫のありたる其わきにとゞまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかゝれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五六尺ばかりのところにとまりたり。其まゝ小石を拾ひあげて狙ひうちし、石はそれぬ。蟲はくるりと一ツまはりて、また舊のやうにぞ居る。追ひかくれば迅くもまた遁げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラ／＼とさゝやかなる羽ばたきして、鷹揚に其二すぢの細き髻を上下にわづくりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。其居たるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呌きざま、躍りかゝりてハタと打ちし、拳はいたづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと思ふ心を籠めて瞻りたれば、蟲は動かすなりたり。つくづく見れば羽蟻の形して、それよりもやゝ大なる、身はたゞ五彩の色を帯びて青みがちにかゞやきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光澤ある蟲は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出でたれば、打置きてすくく引返せしが、足許にさきの石の二ツに碎けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒蟲をねらひたり。

このたびはあやまたず、したゝかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくゞりて小砂利をさそひ、ばら／＼と谷深くおちゆく音しき。

袂のちり打はらひて空を揚げば、日脚や、斜になりぬ。ほか／＼とかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむす痒きこと限りなかりき。

心着けば舊來し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけ居たり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねり／＼果しなきに、兩側つゞきの躑躅の花、遠き方は前後を塞ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの眞蒼き下に、イちはわれのみなり。

鎮守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つ盡ればまたあらたに顯る。起伏恰も大波の如く打續きて、いつ坦ならむとも見えざりき。

あまり倦みたれば、一ッおりてのぼる坂の窪に踞ひし、手のあきたるまゝ何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出來たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直なるもの、心の趣くまゝに落書したり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻に毒蟲の觸れたらむと覺ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出來たるを、姉に見せばやと思ふに、俄に其顔の見たうぞなりたる。

立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透かで躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりまさりたるに、手を見れば掌に照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯見ればおなじ躑躅のだら／＼おりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでか慙てあらむ、こたびこそと思ふに違ひて、道はまた蜿れる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得堪へずなりたり。再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きて居つ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある處に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにばつと茜さして、眼もあやに躑躅の花、たゞ紅の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の聲たかく、あるほど聲を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遙に瀧の音聞えたり。どうくんと響くなかに、いと高く冴えたる聲の幽に、「もういゝよ、もういゝよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ圖なることを認め得たる、一聲くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうく心たしかに其の聲したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰おろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ひたる紅の雪のなかをばのがれつ。背後には躑躅の花飛びく々に咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内の手洗水のあたりを籠めたり。柵結ひたる井戸ひとつ、銀杏の古りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀あり。此方は裏木戸のあき地にて、むかひに小さ

き稻荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鐵の輪を嵌めたるさへ、心たしかに覺えある、こゝよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。たゞひとへにゆふ日照りそひたるつゝ、じの花の、わが丈よりも高き處、前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅と、紫と、靑白の光を羽色に帶びたる毒蟲のキラ／＼と飛びたるさまの廣き景色のみぞ、畫の如く小さき胸にゑがかれる。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯かで一人いで來しを、弱りて泣きたりと知られむには、さこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせて謂ひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもはず。ひとり境内にゐみしに、わつといふ聲、笑ふ聲、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる兒の五六人前後に走り出でたり、こはかくれ遊びの一人が見いだされたるものぞとよ。二人三人走り來て、わが其處に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたゝといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。兒どもが親達の家富みたるも好き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線弾きて折々わが門に来るもの、溝川に鰯を捕ふるもの、附木、草履など鬻ぎに来るものたちは、皆この兒どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。然るに町方の者といへば、かたゝなる兒どもも尊び敬ひて、頃刻もともに遊ばんことを希ふや、親しく、優しく勉めてすなれど、不斷は此方より遠ざかりしが、其時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪へがたかりし其心のまだ失せざると、恐しかりしあとの樂しきとに、われは拒まずして頷きぬ。

兒どもはさゞめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすものを定めしに、われ其任にあたりたり。面を蔽へといふまゝにしつ。ひっそとなりて、堂の裏崖をさかさ落つる灌の音どろろと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ。」

と呼ぶ聲、飴に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ來れり。大なる樹のすく／＼とならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。

聲したる方をと思ふ處には誰も居らず。こゝかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また舊の境内の中央に立ちて、もの淋しく賸しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、閑としてももの聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき兒どもなれば、かゝる機會を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまゝ、密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをと不圖思ひうかぶに、うちすてて踵をかへしつ。さるにても萬一わがみいだすを待ちてあらばいつでも出でくることを得ざるべし、それもまたはかり難しと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、何處より來りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃いたる土のひろくと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍に居て、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、其手を懷にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「此方へおいで。此方。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる兒のありかを教ふるとさとりたれば、いそぐと従ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ處に違はず、堂の前を左にめぐりて少しのきたる突あたりに小さき稻荷の社あり。青き旗、白き旗、二三本其前に立ちて、うしろはたゞちに山の裾なる雜樹斜めに生ひて、社の上を蔽ひたる、其下のをぐらき處、孔の如き空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたゝるばかり斜にわが顔を見て動けるほどに、あきらかに其心ぞ讀まれたる。

さればいさ、かもためらはで、つかくと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。

落葉、朽葉堆く水くさき土のにほひしたるのみ、人の氣勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またゝくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。何方にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず啊呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然として眼を睜りぬ。足ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左

手に坂あり。穴の如く、其底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々たる坂下より、ものののぼるやうなれば、こゝにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮もなさで社の裏の狭きなかにげ入りつ。眼を塞ぎ、呼吸をころしてひそみたるに、四足のものの歩むけはひして、社の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず。こゝをわれに教へしを、今にして思へばかくれたる兒どものありにあらで、何等か恐しきもののわれを捕へむとするを、こゝに潛め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯の火影あかが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひそみたる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて來りし感あり。

恰も其立留りし折から、別なる聲音、また坂をのぼりてさきのものと落合ひたり。

「おい／＼分らないか。」

「ふしぎだな、なんでも此邊で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の聲に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。